

「ステイツ・オブ・デモクラシー：ポピュリズム・熱議民主主義・アーキテクチャ」

吉田 徹（北海道大学）

0. はじめに

- 「デモクラシー」の機能不全：傾向としては 2000 年代入ってから
⇒成長率の鈍化に伴うライフ・チャンスの縮減、生活リスクの不平等な分配等々：「社民主義的含意」(R.ダーレンドルフ)の喪失？
- 民主主義への支持増加、但し機能不全の指摘：
ジョセフ・ナイ Jr 『政府はなぜ嫌われるのか (Why people don't trust government)』(1997) / パットナム『嫌われる民主主義 (Disaffected democracies)』(2000) / スコッチポル『縮減した民主政 (diminished democracy)』(2003) / ダルトン編『民主政の挑戦、民主政の選択 (Democratic Challenges, Democratic Choices)』(2004) / クラウチ『ポスト・デモクラシー (Post democracy)』(2004) / ヘイ『私たちは政治をなぜ嫌うのか (Why we hate Politics)』(2007) / ストーカー『政治はなぜ重要か (Why politics matters)』(2008) ... <民主政>の現状への警鐘相次ぐ
- 共通の認識：①先進国での代議制民主主義の機制や主体（政治家、政府、議会、政党）への不信感の上昇、②民主政の維持機能を担うとされていた政党・中間団体・市民団体の変容、③市場原理の貫徹や政治的急進主義の意識増
- 「デモクラティック・ステイツ」の「ステイツ・オブ・デモクラシー」への視点変化
⇒これ自体は<ポスト 55 年体制>の日本と課題の共有

1. ポピュリズム

- 近年まで学術的な研究対象とならず (Ionescu&Gellner 1969)：もともと 19 世紀から現象としては存在
- 「事象であって教義ではない」(Wiles1969:166)？
- 「大衆迎合」や「バラマキ」と同義なのか？
⇒Ph.シュミッター (2007)：既存政治への「道徳主義的批判」、硬直した政治システムに対する流動性の付加
⇒人々 (people) の<政治化>によって「代表制」機能の拡張機能を一時的に担う
⇒閉鎖的な共同性と敵対性の政治への傾斜
- 「ポピュリズムの実践は民衆の幼稚さを増幅し、さらに不寛容まで広がるかもしれない。しかし、ポピュリズムの存在は民主主義の本質や約束について何か重要なことを思い出させる」(ストーカー2013：197)
⇒リベラリズムの原則の弱体化に伴う政治現象：ポピュリズムによる民主政危機ではなく、民主政危機によるポピュリズム生起

2. 熟議民主主義 (Deliberative Democracy)

- 民主政治理論の「熟議的転回 (deliberative turn)」 (Dryzek 2002) ?
- 多様なものの、①個人化に伴う政治参加 (とその意欲) の減退、②代議制デモクラシーの正当性根拠の揺らぎ、③一般市民のエンパワーメントを通じた再活性化を問題意識 (Fishkin&Laslett 2003; Elster 1998)
 - ⇒参加者の選考変容の可能性追求、「集計民主主義 (aggregative democracy)」への批判
 - ⇒実践としてのDD: 住民参加型予算、討議制意見調査 (Deliberative Poll)、「計画細胞」、「市民陪審制」、「科学技術コンセンサス会議」
 - ⇒「開放系」の共同体設計
- 「資格条件」と「集団極化 (group polarization)」問題がつきまとう

3. アーキテクチャ

- 「多数者の専制」と「資格条件」の問題をクリアする
 - ⇒レッシング (2001年)
 - 行動を制約する方途として法律 (命令)、規範、市場、アーキテクチャ=①罰則を含むルール策定 (法令)、②教育や説得 (規範)、③入場料の設定 (市場) +場所を不可視化、異なる動線設定
 - ⇒アーキテクチャにガイドされる側の自由権は、主観的には制約されない=「規制形態を規制する環境管理権力」の設定による秩序維持と危険回避
 - ⇒リベラリズムとガバナンスの両立
- 日本における受容: 情報社会論、社会システム論が中心
 - ⇒①主体の意識や条件資格を問わない、②その時々々の文脈や私的関心に呼応、③総和が社会の公共性・厚生を高めることになるという主張 (e.g ゲームフィケーション、ハクティヴィズム)
- <後期近代>という情況認識
 - ⇒「大きな物語」による動機付けの消滅と「データベース型消費」の常態化 (東 2001)
 - ⇒「私人」と「公人」という近代二分立法の超克
 - ⇒物語消費による暴力や剥奪感に対する安全装置 (宇野 2008)
 - ⇒その実践方法: 貨幣システム、投票システム、契約論 (鈴木 2013)。
- 西洋経由の日本理解 (コジェーヴ、バルト) +全体主義的基礎付け主義への対抗構想 (浅田)
 - ⇒近代的市民<像>の置き換え: 「再帰的 (reflective)」ではなく「反応的 (reflexive)」
 - 「自由は置物のようにそこにあるのではなく、現実の行使によってだけ守られる、いいかえれば日々自由になろうとすることによって、はじめて自由でありうる」丸山 1961年: 155-156
 - 「知的に自立した人間は、人間の関係や社会の秩序を人間の意志によって作りかえることのできるものだと考える」(山口 2008:203)
- cf.政治学者の (異なる) 応答:

田村 (2011 年)

⇒アーキテクチャ (nudge) は「民主主義の押し付け」という意味ではパターンナリスティック

⇒メタ・システム (アーキテクチャ) を生むメタ・メタ・システム (討議) の擁護

空井 (2012 年)

⇒政治での「無謀な目標と立てて失敗し幻滅するということを繰り返したのちに生じる深い陰鬱」が問題、むしろ緩いコンセンサスをベースにした「理念のはっきりしない、ゆるい政党」を好む日本人

⇒「空気」を読むことによる代表民主制の拡張可能性、「民主政 1.5」の実現

...前者はアーキテクチャを肯定するが熟議を前提とすることで、これを無意味化

...後者は民主政を熟議不要のアーキテクチャの一つと捉えるものの、市民の熟慮を要請

⇒手に負えていない「アーキテクチャ論」?

⇒「規範」と「実証」に分化してしまっている政治学自身の課題

4. おわりに

■ポピュリズム、熟議民主主義 (DD)、アーキテクチャ論何れも「民主主義の民主化」を志向

⇒戦後政治学:市民の主体意識や政治コミットメントの度合いの差し引きで評価...参画意思の質的尺度については不問

⇒「立憲主義の精神」は「生きる道」「善き生」といった個人的領域には踏み込まない:「自分で考える」(長谷部 2004)

	規範的人間像	公私分離
ポピュリズム	○	×
熟議民主主義	○	○
アーキテクチャ	×	×

■ ポピュリズム・DDは「善き生」の(異なる)希求、アーキテクチャ論は「善き生」は不問私的空間の変容が民主政への機能不全につながっているのだとすれば、これの学問体系への<再編入>が必要?...そうでなければ「公」の価値そのものが剥奪され続けることに

■ 坂口 (2001 年) の構想:個人の私化と公的空間の<順接>

⇒再定義と言説戦略の必要性

【参考文献】

Dryzek, John, S. (2002) *Deliberative Democracy and Beyond: Liberals, Critics, Contestations*, Oxford: Oxford University Press.

Elster, John, ed. (1998) *Deliberative Democracy*, Cambridge: Cambridge University Press.

Fishkin, James and Peter Leslett, eds. (2003) *Debating Deliberative Democracy*, NY: Blackwell.

Ionescu, Ghita, and Ernest Gellner, (1969), *Populism: Its Meaning and Movements and National Characteristics*, London: Weidenfeld & Nicolson.

Schmitter, Philippe, C. "A Balance Sheet of the Vices and Virtues of 'Populisms'," in *Romanian Journal of Political Science*, January, 2007

Wiles, Peter (1969), "A Syndrome, Not a Doctrine," in Ionescu and Gellner.

東浩紀 (2001) 『動物化するポストモダン』 講談社現代新書

宇野常寛 (2008) 『ゼロ年代の想像力』 早川書房

阪口正二郎 (2001) 『立憲主義と民主主義』 日本評論社

鈴木健 (2013) 『なめらかな社会とその敵』 勁草書房

空井護 (2012) 「現代民主政 1.5—熟議と無意識の間」『アステイオン』 vol.77

田村哲樹 (2008) 『熟議の理由』 勁草書房

長谷部恭男 (2004) 『憲法と平和を問いなおす』 ちくま新書

丸山眞男 (1961) 『日本の思想』 岩波新書

山口二郎 (2008) 『若者のための政治マニュアル』 講談社現代新書

レッシング L. (2001 年) 山形・柏木訳 『CODE—インターネットの合法・違法・プライバシー』 翔泳社